佐江衆一

海からの眺め

佐江衆一

海からの眺め

新潮社版

海からの眺め

昭和五十四年六月五日印刷
昭和五十四年六月十日発行

定価九八〇円

著者　佐江衆一

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一　振替　東京四-八〇八
電話　業務部(266)五一一一　編集部(266)五四一一

印刷　塚田印刷株式会社
製本　神田　加藤製本

© Shûichi Sae, 1979, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

海からの眺め・目次

海からの眺め　7
赤い貝の舟　29
祭の暗がり　65
対岸　93
爪　111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花影の斧　121
蕺草　163
アシカの行列　187
崖ふち　223

装画　福井良之助

海からの眺め

海からの眺め

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

――橋の上から靴を落してしまいました。それが沈まないで、海のほうへゆっくり流れてゆくの。おわんの舟みたいにね。

おかしそうにいう、女の声がきこえた。

〈おやおや、それは気の毒に〉

応える男の声は、しかしききとれなかった。

私がいつもの窓際の席につくと、その男女は斜めむこうの壁際の席に、向いあって坐っていた。前に一、二度、この海辺のレストランで見かけたような気がする。

女は黒いハイヒールをはいて、脚をくんでいた。若い女ではないが、足首のしまったきれいな脚だ。靴を川へ流してしまったというのは、今日のことではないのだろう。

〈するとその日は、はだしで帰ったわけか……〉

海岸道路の端を、女がはだしで、かかとをつけようかつけまいか迷っているふうにつまさきだって、独りで歩み去ってゆく後姿がとっさに思いうかんだ。ふくらはぎに力がこもって、女の脚が精いっぱい怒っている……。

まさか靴を一足、橋の上からそっくり落してしまったのではないだろうから、残ったほうの靴を、片手にぶらさげていたかもしれない。いや、はじめはそうではない。残った靴を、右足にだか左足にだかしらないがはいて、びっこをひいて歩き出した。その跛行を、案外たのしんでいた……。どうしてかはうまくいえないが、ふとそんな気がする。

それがやはりぬいでしまって、片手に厄介なものでも指先でつまむぐあいにぶらさげて、歩きはじめる。だが片方だけの靴が無用なことに気づく。というより、未練がましい自分が急にいや

になる。女は砂浜のほうへ、思いきり遠くその靴を投げ棄てた。投げ棄てたのを境に、すべてがすっきりした。とすれば、彼女はつまさきだってこわごわ歩いてはいなかったろう。すあしの足裏が感じとる、ザラザラして少し痛い道路の感触を、むしろ愉しみながらたしかめたしかめ、歩いていた……。

私は女の脚を眺めながら、眼をつぶる気分で、そんな想像をめぐらした。いずれにしても、勝手な空想である。

女は、海のほうに向って坐っていた。遅い午後の、海からの冬の陽が窓から射しこんでいて、女はちょっとまぶしそうにしていた。こころもち軀をひねって、男のほうへ上体をのりだす感じでしゃべっている。三十を少し過ぎているだろうか。眼に見えない胸もとの傷をかばっているふうにも見えるが、男へさりげなく身をあずけきっている安らぎが、女の全身に漂っていた。

男のほうは、海側に背をむけているので横顔がほんの少し見えるだけだが、頭髪の寂しいぐあいと、海からの光に晒された、皺のある首筋から肩にかけてのやや重く澱んだ感じから、女より年上の、三十代の後半かもしれない。あるいは、四十を過ぎた私と同年ぐらいだろうか。

――橋の上からいつまでも眺めていたわ。いつ沈むかいつ沈むかと、それが怖いような、逆に期待しているような、妙な気持でした。海に流れ出て、ゴミみたいにちいさくなって、波にもまれながらそれでも沈まないで、沖のほうへ消えていったわ。わたしの靴がプカプカ浮いたまま漂っていってしまうのかと思うと、急におかしくなって、ひとりで声をたてて笑ってしまったけど。

実際に女は、声をたてて笑った。男の笑い声がした。私もつられて、くすっと笑っている。

だがそれにしても、どんなぐあいで靴を落してしまったのだろう。女の話から察して、河口の橋の上とわかる。しかしふつう靴をはいて橋の上に立っていて、落すわけはない。

もう若くはない女は、欄干に気取って身を凭せるでもなく、手をついてポーズをとるぐあいに上体を支えるでもなく、自分をどこかへ置き忘れたように放心して、軀のうちを吹きぬけてゆく風になりきっていた……。

それとも、欄干のあいだから片方の脚を突き出して、かかとのぬげたハイヒールをつまさきで支えて、形のよい自分の脚に見とれながら、燥いでいた……。茶目っ気があるのかもしれないが、しかしそんないたずらを独りで愉しむような小娘ではない。いつの出来事を話しているのだろう。

レストランには、私たちのほかに客の姿はなかった。静かなピアノ曲がながれている。

窓の外には海の風が吹きつのっているのに、風の軋みはきこえず、砂浜と海岸道路との境の、低い松林の梢が絶えず揺れて、そこに風の形がまぶしく見てとれる。一刻まえまで砂浜にいた私の軀のうちに、海の風が紛れこんでいる。

その私の耳へささやくように、女の声がひびきこんできた。

——靴が、わたしの身替りみたいだったわ……。

その日も私は、錆びた自転車を軋ませて、午後遅く、近くの海岸へ出かけて行ったのだった。マフラーに亀の子みたいに首をうめ、背をまるめて、ゆったりゆったり大股に歩くぐあいにペダルを踏む。昼と夜をとりちがえている私には、その時刻が起きぬけの朝の散歩だが、夜を待つための時間つぶしである。私は夜、小説の仕事をして、人びとがせっせと働いている昼間は寝ているかぶらぶらしている。

磨きぬかれた海辺の冬空に太陽が輝いていたが、海からの冷たい風が吹きつのっていた。こんな二月の風の日の、ウィークデーの午後遅く、砂浜を散策するもの好きもひま人もまずいない。

人影はなかった。

自転車をとめ、私は砂浜に歩みこむ。砂防のヨシズが砂にすっかり埋もれて、杭の先端をわずかにのぞかせた砂丘が、交互にゆるやかな長いうねりを打っている。水平線は濃い紺色の鏡のようだ。砂丘を削るように輝いていた。

私は風紋を踏んで砂丘をのぼる。くずれる砂の、ぎゅっと軋んでひきしまる感触が、靴底をとおして足裏につたわった。

砂粒と砂粒のあいだは無数のひとつらなりの間隙なのに、砂の上を歩むとき人はなぜその間隙へ地中深く転落してゆかないのかと、質問した友人がいた。なるほどそういわれてみれば、私の重みで砂粒はおしのけられて、私をそっくり誘いこむ空間が足下に果てしもなくひらけるわけだ。私は答を考えるよりも、私の重力でできるはずの、その砂の人形(ひとがた)の隙間へ、むしろ涯もなく落下してゆく心地よさをおもった。

私の軀の周囲を白砂がさらさらと無限に流れてゆく。微光が射しこんでいて、ゆけどもゆけども、物の象(かたち)がはっきりと見わけられる薄明である。ほんのりと日なたの潮の匂いがする。私自身が白い砂の滝になって、軽ろやかに滑ってゆくようだ。落下しはじめたときは、狂気のようなものにすがりつこうとしていたのに、その掌をゆるくひらいて、軀じゅうからも力をぬいて、ひたすら身をまかせている。どこかで、絶えず海のひびきと風の音がする。軀にしこっていたものの一切がほどけてゆき、天と地のあわいを心地よく流れてゆく……。

そのように決して落ちることはないという友人の物理的説明に、私はがっかりした。実際、砂の上の私は墜ちてゆかない。

砂丘の高みから、しばらく冬の海を眺めた。波打際にも人影はなかった。右手の海にサーフィ

ンをやっている若者たちの姿が見えたが、彼らは黒い瘠せた鳥の姿で、寒そうに点々と海にうかんでいた。

私は風に吹かれて佇んでいた。陽の光はまぶしすぎるほどなのに、軀の芯までが冷えきってゆく。寒さに耐えられず、風をよけて砂丘のかげの日溜りにしゃがみこむ。自分の軀にみあった窪みをつくるぐあいに身をすぼめてうずくまり、苦労して煙草に火をつける。私は砂の穴の底から、風の味のする一筋の煙を吐いて青空を見あげている虫けらのようだ。そんな虫がいればの話だが。

私はしかしその虫けらになって、何も考えてはいなかった。妻と子供たちのことも、昨日のことも明日のことも、何ひとつ考えてはいない。自分からそこにきているのに、なぜこんなところにうずくまっているのか、その自分がなにものなのか、一切の疑いがうかんでこない。それでいて、そこまでたどりついた私の足跡を、風が、少しずつ確実に消してゆくのを、寛いだ気分で眺めている。

砂粒は絶えず一粒一粒崩れ、そして動いていた。少しでも低いところを求めて、わたしがお先に行くとでもいうように転がる。あとに残って、もちこたえていた奴が、たまらずに後を追う。身軽な白砂は軽快だ。湿った砂の崩れぐあいは未練がましく仲間を道連れにして、身も世もない感じである。やがて陽の光と風に湿り気を奪われて白砂の仲間入りをすると、小虫のように跳ね、風に身をまかせて、冬の光のなかへ飛び跳ねてゆく。

私はあきもせずその砂に見入っているのだが、軀がすっかり冷えきってしまったのをしおに立ちあがり、自転車をころがして、海岸道路のはたにあるレストランに向って歩きだす。真白い三角屋根に《赤い風船》と書かれているそのレストランへ、私は冷えきった風と砂粒のように軀をすぼめて舞いこんでゆく。店内はほどよくあたたまっていて、急に頬の火照りを感じながらコー

トを脱ぎマフラーをとる。私の軀のなかには、砂粒の自由な感覚と、冬の海のくらくらするまぶしさが、今夜の仕事のエネルギーのように残っている。

おや、今日もおみえですね、といいたげな表情で、顔見知りのウェーターが熱いおしぼりを運んでくる。

——風が強いですね。

蝶ネクタイのウェーター氏は、つぶやくように挨拶した。

〈まさか変な気をおこして、それで橋の上に、独りで立っていたわけではないだろうね〉

男の話し声は相変らずききとれなかったが、私は、飲みくだした熱いコーヒーが冷えきった軀の芯へしみいってゆくくつろぎを感じながら、落した靴が身替りみたいだったと話した女へ、訊ねたくなっている。

橋の上から女の姿がふいに消えたあとに、女物の靴が一足、きちんと並んで風に吹かれていた……。だが、そういうことにはならなかった。

どうしたはずみでか、自分よりひとあし先にぽろっと川へ落ちてしまった片方の靴を、女はアッと小さく声をあげて、眼で追った。きょうのような冬の日昏れだった。いや、まだ秋のはじめで、河口の砂浜には、ひと夏の賑わいの名残りが湿った砂にまみれて残っていた。とり壊しかけたまま忘れられてしまったような、骨組だけになった脱衣小屋が立っている。女は、その無人の砂浜を視界のすみにおさめながら、流れてゆく靴をみつめて、橋の上に風に吹かれて独りで立ちすくんでいた。

日没の直後で、川の水面には青白い薄闇が漂いはじめているのに、沈みもせずにゆっくり流れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com